

東アフリカにおける民族服カンガの日常着としての受容に関する  
社会学的および生理学的考察

Sociological and Physiological Role of Kanga, Traditional Ordinary Clothing in East Africa

深沢 太香子\*<sup>1+</sup>, 熊谷 伸子\*<sup>2+</sup>, 栃原 裕\*<sup>3+</sup>, 織本 知英子\*<sup>4+</sup>  
Takako Fukazawa\*<sup>1+</sup>, Shinko Kumagai\*<sup>2+</sup>, Yutaka Tochihara\*<sup>3+</sup>, and Chieko Orimoto\*<sup>4+</sup>

\*1 福岡女子大学 人間環境学部 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1  
Faculty of Human Environmental Sciences, Fukuoka Women's University,  
1-1-1, Kasumigaoka, Higashi-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka, Japan

\*2 文化女子大学 服装学部  
Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University

\*3 九州大学大学院 芸術工学研究院  
Faculty of Ergonomics, Kyushu University

\*4 ポレポレオフィス  
Polepole Office

+服飾文化共同研究拠点, 文化ファッション研究機構, 文化女子大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : The aim of this study is to clarify, in terms of both sociological and physiological aspects, the reasons why females in East Africa usually wear the Kanga as their daily costume. In the second year of the study, we have investigated history of clothing in Kenya. Consciousness and actual wearing situations of the Kanga were also studied through a survey. Adaptable climate range of the Kanga clothing system was estimated through experiments. According to the Cluster analysis, it is found that wearing scene is composed of "formal services" and "daily life". That is, they indeed employ the Kanga as their daily wears, because the Kanga is recognised not only as convenient and functional tool, but also aesthetic tool for women. The adaptable range depends upon its wearing condition. In case the Kanga is employed as a skirt only, the adaptable climate ranges from 20 °C to 28 °C, which are equivalent to rainy season in coast area, e.g. Mombasa. On the other hand, if most of the whole body is covered with the Kanga, it enables people to stay in comfort from 10 °C to 24 °C, which is equal to the climate in Nairobi.

### はじめに

民族服は、地域の気候風土や文化に即して発展してきたモノ(服装)である。したがって、生活文化における民族服の存在意義は極めて大きいはずであった。しかしながら、今日においては、日本をはじめ先進国において、民族服は主として儀礼的なモノ(服装)として使用されている。一方、タンザニアやケニアを中

\*1) fuka@fwu.ac.jp

心とする東アフリカでは、民族服カンガが日常着として用いられていることは、非常に興味深い。そこで、本研究では、東アフリカを対象として、民族服が今もなお日常生活と密接な関係を維持している理由について、社会学的・生理学的視点から検討する。

研究二年度となる本年度は、カンガの誕生とそれに至るまでのケニア（東アフリカ）の衣装変遷について文献的調査と、カンガを日常着として用いることに対する意識調査を東アフリカにて行った。さらに、カンガの熱・水分移動特性を把握して、東アフリカにおける気候風土との関係について検討した。

## ケニアにおける衣装の変遷

### 【19世紀以前の服装とスワヒリ社会】

東アフリカ沿岸では、長くインド洋交易が行われる中、各地に交易都市が発展し、イスラームを基調とした独特のスワヒリ文化が育まれた。スワヒリ都市では経済的發展に伴い階層化が進み、人々の衣装もその階層に応じて異なっていた。華やかで豪華な衣装を着ることは、富と権力の象徴であり、より文化的であることの証であった。また、儀式での威厳を演出する役割も担っていた[1]。16世紀初頭に著された記録資料[2]によると、モンバサに暮らす王族や裕福な人々は、男性は2枚の綿布や絹布を用い、女性は何枚もの絹布を腰に巻いたり肩にかけたりし、金や銀の装飾品を身に付けていた。一方、下層民や奴隷は、綿布だけを身に付けていた。奴隷は、すでに12世紀初頭には、スワヒリ社会に存在していたといわれる[3]。これらの綿布の多くは、主にインドのグジャラート商人によってカンベイから運ばれ、彼らは綿織物と引き換えに金や象牙、奴隷などを入手していた。当時、東アフリカ沿岸とカンベイは海路2週間であった[4]。綿布などが東アフリカに輸入される一方、パテ島では、古くから綿の栽培と綿布や絹布の製作が行われていた[1]。

### 【19世紀における服装】

19世紀になると、モンバサは、ザンジバルを拠点とするオマーンのブー・サイド朝の支配下に入る。当時著された記録資料[5-7]によると、上流の女性やアラブの女性は、図1のような、カラフルなカンズー（貫頭衣）にフリルのついたズボン、刺繍のあるチュニック、縫取りのマスクといった、豪華なアラブ風衣装を着用していた。また、カンズーにショールという衣装（図2）も着用されていた。自由人のスワヒリ女性は、「キストゥ」と呼ばれる布もしくは、インディゴブルーに染めた布を着用するのが一般的であった。



図 1 アラブ女性 (19世紀)

Fig. 1 Arab Woman (19 C)



図 2 モンバサのスワヒリの女性 (19世紀中頃)

Fig. 2 Swahili woman at Mombasa (Mid 19 C)



図 3 ケニア東海岸のスワヒリ女性 (1890')

Fig. 3 Swahili woman at the coast (1890')

### 【19世紀中期の服装とカンガの前進の一つと考えられるレソ】

19世紀中頃には、カーチーフ6枚分を縫い合わせた大判の「レソ」と呼ばれる布もあった。女性たちは、1枚のレソを胸から足首まで巻き、もう1枚を肩や頭にかけていた。当時、この布の人气が一番高かったようである。他に、「ムストゥ」や「シィティ」などもあった。奴隷の男性は「メリカーニ」と呼ばれる未晒綿布を腰に巻き、奴隷の女性は「カニキ」という黒もしくはインディゴに染めた布を胸から下に巻いていた。ちなみに、ケニアのラム島やパテ島、タンザニアのザンジバル島では、このメリカーニに木版ブロックを使って、カンガに似た布が制作されていた。この未晒綿布は、19世紀中頃アメリカから東アフリカに大量に輸入されたものだが、その後1920年代になると日本製が市場を席捲した[8]。

現在、ケニア沿岸地域において、「レソ」はカンガのことを指し、「カンガ」という名称よりも一般的である。「レソ」は、ポルトガル語でハンカチーフやスカーフを意味する言葉に由来する。ハンカチーフはポルトガル時代に東アフリカにもたらされ、1858年頃になるとフランスから大量に輸入された[9]。19世紀の「レソ」には、6枚もしくは12枚を縫い合わせるタイプや、1枚の大判布にプリントしたタイプなどがあり、これらはオランダやイギリス、スイスで製作された。縫い合わせるタイプは一時大流行したが、1892年頃になると人気は低迷し、女性の関心は、大判の一枚布にデザインされたタイプへと移っていった[10]。したがって、「カンガ」と「レソ」は、非常に近い存在であると思われる。なお、6枚を縫い合わせた「レソ」は、現在、コモロ諸島で使用されている「シロマニ」と同様のものと考えられる。

ヨーロッパでは、19世紀後半からカンガの製作が始まり、オランダでは1880年代から生産が始まっている。オランダに残る資料によると、初期のデザインは、インドネシアのジャワ更紗やインドの絞り染めを真似たものや、ヨーロッパに生息する動物柄やボーダーの幅の違うもの(図3)などがあり、現在のものとは若干雰囲気異なるものもある[11]。また、19世紀、モンバサ後背地では、「ハンド」や「グッシェ」と呼ばれる綿製の布や、ケニア内陸部では、牛や山羊などの皮をなめしたものや綿布が衣装として使われていた[12]。

### 【20世紀における服装とカンガの普及】

20世紀になると、モンバサ及びケニアは大きな時代的転換を迎える。イギリスの支配による階層社会の崩壊、奴隷制廃止、ウガンダ鉄道の開通に伴う国際海港都市としての発展、内陸部からの移民増加、キリスト教の布教、西洋文化の普及などによって、社会構造や価値観が変化した[13]。それらに呼応しつつ人々の衣装も変化していった。カンガも普及していくが、その要素としては、1907年の奴隷制の廃止、内陸部から移民達のイスラーム改宗やスワヒリ文化の受け入れ、ダンスや儀礼など女性文化の変質、さらに独立後のケニア国内における繊維産業の振興・発展などがあげられる。それらについては、さらに調査を続行する予定である。

## 民族服カンガに対する意識 —現地調査—

### 【調査の目的と方法】

東アフリカの人々におけるカンガ着用に対する意識および着用実態を明らかにすることを目的として、モンバサを中心にフィールドワークを行うと共に、南北のコーストエリアに在住する女性298名を対象に質問紙による調査を集合調査法により実施した。調査時期は、2009年10月～11月である。調査項目は、年齢などの基本的属性、カンガの使用実態や購入実態等に関する項目である。購入実態やカンガ着用の場面に関しては、「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」までの4段階評価で回答を求め、4点から1点ま

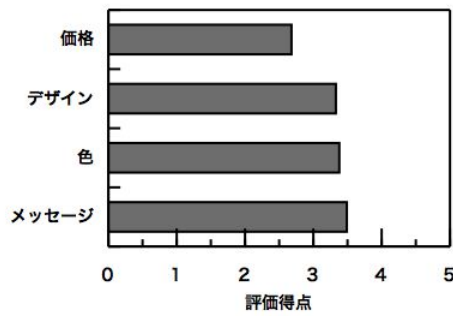


図4 カンガ購入時の重視点  
Fig. 4 Selection points of purchasing the Kanga

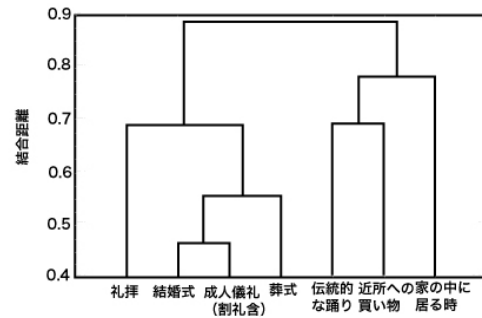


図5 カンガ着用場面におけるクラスター分析  
Fig. 5 Cluster analysis of the Kanga wearing scene

での点数を割り振り、クラスター分析(ウォード法)を適用して分析した。

**【結果および考察】**

調査対象者の平均年齢は、32.2 歳である。既婚者は、61.9%であった。出生地は、67 箇所と大変幅広くなっていたが、モンバサが 25.2%と最も多くなっていた。宗教については、モスリムの人が 50%、プロテスタント、カトリックという順であった。なお、カンガの平均所持組数は、20.0 組(40 枚)であった。10 組(20 枚)の人が 14.4%と最も多く、次いで 20 組(40 枚)が 12.4%、5 組(10 枚)が 10.1%となっており、1~10 組までに全体の 6 割が存在しており、1 枚も所持していない人は存在しなかった。このことから、カンガは民族服ではあるが、現在の人々の着装の一つとして定着していることが確認された。なお、100 組(200 枚)以上所持している人も僅かながら存在した。また、カンガ購入の際の重視点を問うた結果を図 4 に示す。メッセージ、色、デザインが高くなっていた。その中でも、メッセージが最も高くなっており、カンガが単に衣服として人々に着用されているわけではないことを、本結果から垣間見ることが出来る。つまり、カンガにおけるジナといわれるメッセージが重んじられて、人々に活用されている現状を本結果から把握することが出来る。社会生活から時事や政治に対するまで、非常に幅広いメッセージがカンガには印刷されているが、これは単にデザインとして扱われているのではなく、そのメッセージこそが人々に重要視されている。

カンガ着用の場面を訊ねた結果について、クラスター分析を用いて検討した結果を図 5 に示す。礼拝、結婚式、成人儀礼(割礼含)、葬式からなる「儀礼礼拝」群と、伝統的な踊り、近所への買い物、家の中にいる時という「日常生活」という 2 つの群から、着用場面が構成されることが明らかになった。つまり、日本の和服のようにいわゆるハレの場において和服を着用するというのではなく、カンガにおいては、日常の場面においても着用されており、人々の生活に大変密着していることが明らかになった。図 6 に示すのは、カンガに対する認識を訊ねた結果である。カンガは、使い勝手が良く、メッセージを届ける機能があるものだとほとんどの人が認識していた。さらに、女性のみがカンガを着用するので、女性に美をもたらすものであるとも認識されていた。歴史を有する民族服であるのだが、大変に身近で且つ好意的にカンガが人々に受け止められていることが明らかになった。

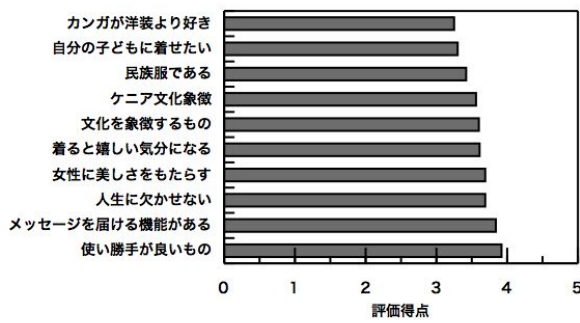


図 6 カンガに対する認識  
Fig. 6 Recognition of the Kanga

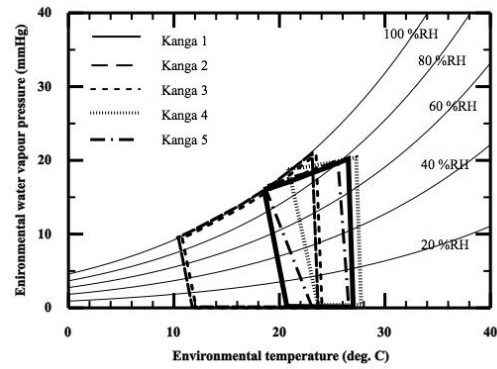


図 7 カンガの典型的着装条件で適応する環境の範囲  
Fig. 7 Adaptable climatic zones in wearing the Kanga ensembles

表1 カンガの着装条件  
Table 1 Employed clothes in each Kanga clothing system

Employed clothes		Kanga 1	Kanga 2	Kanga 3	Kanga 4	Kanga 5
Underwear	brassiere	✓	✓	✓	✓	
	panties	✓	✓	✓	✓	✓
Middle wear	tank top	✓	✓	✓	✓	
	long skirt	✓	✓	✓	✓	
Kanga	tops		wrapped from the sholders	wrapped from the sholders including the head		wrapped from the sholders
	bottoms	wrapped from the breasts	wrapped from the waist	wrapped from the waist	wrapped from the waist	wrapped from the waist

### カンガによる環境適応域の推定

#### 【カンガの着装条件および推定方法】

ケニアでは、カンガ 1 枚を胸あるいは腰に巻き付ける、いわゆる腰衣型の着装方法と、カンガを 2 枚使用してほぼ全身を覆う、全身包被型の着装方法が典型的である。そこで、表 1 に示す 5 種類の着装条件を対象として適応し得る環境を求め、ケニアにおける気候との関係から検討することとした。なお、着衣による快適環境適応の推定には、MecheelとUmbachが導出した式より、適応可能な上限および下限から適応域を得るといふ陳と田村[14]の手法を用いた。推定に際して、適応の下限には安静時の熱産生  $50\text{W}/\text{m}^2$  [15]を、上限には家事労働を想定した熱産生  $135\text{W}/\text{m}^2$  [15]とした。

#### 【着衣の熱・蒸発熱抵抗】

環境適応域の推定には着衣における熱・蒸発熱抵抗が必要となる。そこで、各々の着衣における熱および蒸発熱抵抗には、表 2 に示す値を採用した。熱抵抗は、サーマルマネキン(PT-Teknik 社)を用いて実験的に得た。その測定における温熱環境条件は、ケニア沿岸地域(モンバサ、ラム、マリンディ)の年間平均気候である  $26^\circ\text{C}\cdot 80\%RH$ 、気流  $0.4\text{--}0.5\text{ m/s}$  とした[16-19]。一方、蒸発熱抵抗は、繊維充填率から蒸発熱抵抗を推定し[20]、さらに重ね着と体表における被覆面積比を考慮した値である。

表2 本研究の着装条件における熱・蒸発熱抵抗とそれに関連する特性  
Table 2 Thermal properties of the tested Kanga clothing systems

Resistance	Kanga 1	Kanga 2	Kanga 3	Kanga 4	Kanga 5
Thermal resistance ( $m^2K/W$ )	0.15	0.22	0.22	0.13	0.16
Water vapour resistance ( $mmHg \cdot m^2/W$ )	0.53	0.65	0.65	0.41	0.27
Clothing area factor, $f_{cl}$ (-)	1.23	1.45	1.56	1.22	1.33
Total weight (kg)	0.619	0.813	0.813	0.425	0.412

### 【カンガによる環境適応域】

各着装条件における快適環境適応域の結果を図7に示す。腰衣型である着装条件 Kanga 1 と 4 における適応域は、各々、約  $20 - 27^{\circ}C$  と約  $22 - 28^{\circ}C$  であった。全身包被型の Kanga 2 と 3 における適応域は約  $10 - 24^{\circ}C$  であるのに対して、同型である Kanga 5 のそれは約  $20 - 27^{\circ}C$  であった。これらの結果より、Kanga 1 と 4, 5 による着装条件は、沿岸地域における雨期(6 - 9 月)と、内陸山岳地域(ナイロビ)の日中の気候[16-19]に適していることがわかった。一方、Kanga 2 と 3 は、日較差の大きな内陸山岳地域と西部(ビクトリア湖周辺)の年間気候にも適していることがわかった。

着衣による環境適応域は、着衣の熱抵抗と蒸発熱抵抗に依存する。その着衣の熱抵抗は、着衣重量との間に正の相関性のあることが報告されている[21]。さらに、着衣の熱抵抗は、人体表面からの熱伝達には身体部位差があり[21]、衣服による被覆部位とその面積の影響も受ける[22]。

Kanga 1 と 4 では同一の衣服を用いた着装条件であった。Kanga 4 ではカンガを腰から巻き付け、下肢の殆どが被覆されていた。一方、Kanga 1 ではカンガを胸から巻き付けているため、下腿の下半分は露出されていたにも関わらず、その環境適応域は Kanga 4 よりも低温側であった。これは、表2に示すとおり、Kanga 1 の表面積ファクター  $f_{cl}$ [23]は Kanga 4 のそれよりも大きいことから、胸に巻き付けることによって、衣服下空気層を多く保持できたためであると考えられる。

一方、同一の衣服を用いた Kanga 2 と 3 の  $f_{cl}$  は異なるものの、着衣の熱抵抗は同値であったため、適応域も同範囲を示した。Kanga 2 では上衣の裾は大腿までを覆い、下衣との隙間、いわゆる下端開口は小さかった。これに対し、Kanga 3 では上衣で頭部を被覆したため、上衣の裾は腹部までとなり、下衣との隙間である下端開口は大きくなった。本報告では局所の熱抵抗に関する詳細は割愛するが、Kanga 3 における頭部を含む体幹と上肢の熱抵抗は、下端開口から流入した周囲空気により衣服内の流れが促進されたため[22]、Kanga 2 との差はみられなかった。

全身包被型である Kanga 5 によって適応し得る環境は、腰衣型に近かった。これは、內衣を着用していないことによって、低い熱抵抗を示したためである。この着装方法は、沿岸地域に居住するモスリムの成人女性が、雨期を温熱的に快適な状態で過ごす際、有効であることがわかる。

以上のとおり、カンガはその着装条件を自在に変化できることによって、1枚のカンガでも幅広い環境に適応することができる。その利便性が、現代においても日常服として用いられている大きな理由の一つであると結論出来る。

## おわりに

ケニアの人々のカンガに対する意識について、現地調査を行った。その結果、カンガが着用される場面は、儀礼礼拝と日常生活であり、本当に日常的に着用されていることが確認された。その理由は、カンガの使い勝手の良さ、カンガ特有のジナによるメッセージを届ける機能性や審美性によって、人々はカンガを好意的に受け止めているためであることが明らかとなった。カンガの熱・水分移動特性を把握して、日常生活を送る上で適応し得る環境を推定した。その結果、カンガを用いた着装条件を簡単に变化させることによって、ケニアの沿岸から山岳地域の広い環境によく適応することが明らかとなった。温暖環境である沿岸地域に適した着装は、腰衣型である。一方、冷涼環境である山岳地域に適するのは、內衣を着用して全身を被う着装条件である。しかし、その內衣を脱衣すると沿岸地域にも適する着装条件となることが明らかとなった。

今後の課題として、現地調査より得られたデータを用いて、カンガのデザイン性、特にジナに対する人々の意識を解析する。カンガが誕生するに至った経緯およびそのデザインに影響を与えた背景との関連性を検討するために、文献調査も継続する。

## 謝辞

本研究では、ケニアの人々を対象とした現地調査を行いました。質問調査票の作成に際して、予備調査にご協力くださいました在日ケニア人の方々に感謝いたします。現地での調査を遂行するにあたり、アンケートに回答くださいました現地の方々ならびに現地案内人の方々に感謝いたします。

## 文献

1. J. G. Prestholdt: *As Artistry Permits and Custom May Ordain*, pp.8-10, Program of African Studies, Northwestern University (1998)
2. D. Barbosa: *The book of Duarte Barbosa and account of the countries bordering on the Indian Ocean and their inhabitants*, pp.19-23, Kraus Reprint (1967)
3. V. V. マトベイエフ: 「ユネスコ・アフリカの歴史」第4巻下巻, pp. 661-696, 同胞舎 (1992)
4. M. N. ビアスン (著) 生田滋 (訳): 「ポルトガルとインド」, pp. 16-20, 岩波現代選書 (1984)
5. C. New: *Life Wandering, and Labours in Eastern Africa*, Frank Cass & Co. LTD (1971)
6. R. F. Burton: *The Lake Regions of Central Africa*, New York Horizon Press (1860)
7. R. F. Burton: *Zanzibar, City, Island, and Coast*, Johnson Reprint (1967)
8. 外務省通商局: 「英領東アフリカ事情」, pp.141-145 (1924)
9. E. Linnebuhr: *Sprechende Tücher Frauenkleidung der Swahili (Ostafrika)*, pp. 12-13 Linden-Museum Stuttgart (1994)
10. L. Schwidder: *Das Hamburger Kolonialhandelshaus Wm.O'Swald & Co. und die Einfuhrung von Techniken in die Kolonien 1890-1914*, Universitat Humburg, pp. 428-432 (2004)
11. 織本知英子: 「カンガ・コレクション」, pp.57-60, 連合出版 (2006)
12. N. Sobania: *Culture and Customs of Kenya*, pp.127-130, Greenwood Press (2003)
13. W. R. Ochieng (Ed.): *Theme in Kenyan history*, Chapter 6, Urbanisation E. M. Aseka, Heinemaan

Kenya (1990)

14. 陳素琴, 田村照子: 台湾伝統服の断熱性とその気候適応域, 人間と生活環境, vol. 10, pp. 18-24 (2003)
15. ISO 8996: Ergonomics – Determination of metabolic heat production, 1990.
16. 東京天文台(編): 「理科年表」, pp. 134-135, 丸善 (1965)
17. NNDC Climate Data Online: <http://www7.ncdc.noaa.gov/CDO/cdo>
18. 国立天文台(編): 「理科年表」, pp. 320-321, pp. 342-343, 丸善 (2001)
19. Weatherbase: <http://www.weatherbase.com/>
20. Fukazawa T, Kawamura H, and Tamura T: Water Vapour Resistance of Hydrophobic Microporous Membranes under Reduced Pressure at a Constant Temperature, Journal of The Textile Institute, vol. 90, pp. 602-615 (1999)
21. 田村照子(編著): 「衣環境の科学」, pp. 38-42, 建帛社(2004)
22. McCullough E A, Jones B W, Huck J: A comprehensive data base for estimating clothing insulation, ASHRAE Trans. Vol. 91, pp. 29-47 (1985)
23. ISO 9920: Ergonomics of the thermal environment – Estimation of thermal insulation and water vapour resistance of clothing ensemble (2007)